

目 次

地域を共創する大学～地域に必要とされ、地域に貢献し、
地域で活躍する人材を育て上げる大学へ～……………小野寺 一成 (1)

学ぶ力から生きる力へ……………鷺尾和紀 (7)

地域を共創する大学

～地域に必要とされ、地域に貢献し、 地域で活躍する人材を育て上げる大学へ～

生活科学科 生活科学専攻 居住環境コース
准教授 小野寺 一成

1. はじめに

現在、日本は2008年より人口減少時代に入り超高齢化社会を迎えている。そのような中、文部科学省は地方大学活性化への取り組み（2015年度）を発表しており^{※1}、地方創生における意義は、「地方大学を活性化することにより、若年層の都市部への集中緩和や大学を核とした地域の活性化に寄与する」としている。地方都市津市に立地する我が三重短期大学においても、人口減少と超高齢化社会を迎えているなか、学科専攻コースを問わず大学総体として、地方創生に向けた地域の活性化に寄与することを検討しなければならない。前述した文部科学省の「地方大学活性化への取り組み」の具体的な方針は、(1)大学の力を利用して地方を活性化させる。(2)地方大学の魅力を高め、地方大学への進学を促進する。とし、その成果は、「大学は『地域コミュニティの拠点』の役割を担い、大学全体として地域を志向した教育・研究・社会貢献の推進」としている。

これを受け三重県においても、高等教育機関を核とした地方創生に向けた取組（2015年度）を発表した^{※2}。「学ぶ場」を中心とした若者の県内定着に向けた取組として、「(1)学生の確保：県内大学進学率（20.2%）の向上、大学収容力指数（42.9）の向上（全国平均120.8）、(2)教育・研究・地域貢献の質向上：高等教育機関と地域の連携による魅力向上、地域が必要とする人材

の育成、(3)学生の就職：大学生の県内就職率（47.5%）の向上、U・Iターンの増加、企業誘致や新産業の創出による事業所数の増加」としている。このうち高等教育機関の魅力向上では、「地域で求められる人材の育成・排出、他校にはない特徴的な研究・教育プログラム、地域課題解決への貢献」が挙げられている。

筆者は、生活科学研究会紀要No.65（2017）において、「地域活性化に向けた地方公立大学のあり方に関する考察－津市立三重短期大学の建替え検討を事例として－」を抽稿し^{参3)}、地域活性化に向けた公共施設集約型の地域創生案を検討し、「今後の地方公立大学は、地域に必要とされ、学生が入学したい魅力的な大学へと環境を整え、若年層の定着と流入を目指し、地域コミュニティの拠点となることが必要ではないか」と論じている。いわゆるハードを中心とした環境整備に関する考察であったが、その中身のいわゆるソフト面では、「将来を目指した魅力ある充実したカリキュラム編成、地域で活躍する人材を育て上げる開設講座や副専攻コース等を検討するなどの大学改革も必要である」としている。本稿は、まさにこの大学改革の内容を検討したものであり、地方都市に立地する市立短期大学の未来に向け、筆者の見解を示し論ずるものである。

2. 地域を共創する大学へ向けた理念

共創とは、まさに「共に創る」という意味だが、ここでは本学が立地する地域の企業・団体・市民と共に、大学が一緒になって地域を創り、地域を共に創造する行為を示す。地域に必要な大学、地域に貢献する大学、地域で活躍する人材を育て上げる、「地域を共に創造する大学」を理念とした。

そこで本学においては、以下のような理念を有した取り組みが必要になると考えられる^{参4)}。一つ目は、「5年、10年、20年後へ、シームレスで持続可能な大学づくり」である。地域に求められ、地域に必要とされる大学を目指して、地域に貢献しながら市立短期大学として発展した上で、その延長としての四年制大学化を位置づける。つまり、いきなりの四大化は困難であると考え、短期大学としてしっかりと地域社会に必要とされる大学になる必要がある。地域で活躍できる人材を育て上げ、さらなる飛躍の必要性を地域社会に認められてからの四大化を目指す。

二つ目は、「地域に必要な人材を育て、地域の課題解決に積極的に取り組む」ことである。「研究」・「教育」・「地域貢献」の三本柱から、「研究」+「教育」→「地域貢献」へのシフトチェンジを行い、地域で活躍できる人材の育成を充実する。地域貢献を意識した研究活動を主体的に行い、地域貢献型研究プロジェクトで地域の活性化に向け、地域が抱える具体的な課題の分析と解決を目指した研究プロジェクトの企画と実現を図る。地域貢献を意識した教育活動を能動的に行い、地域を学生教育の場と位置付け、学生の市内就職そして定住に向け、地元企業・団体等の協力と連携により、課外学習・演習・フィールドワーク等、多様な授業を展開し、学生と企業等の早期顔合わせの実現を経て、地元及び県外学生の市内就職率増加を目指す。

地方創生の基本方針を定めた「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の改訂^{参5)}は、地元の企業や自治体と地方を活性させるために連携する地方大学への交付金を新たに設けたことが柱である。在学中や卒業後の地元での定住につなげ、地方の若者の減少を食い止める目的。…(中略)…地方大学向けの新たな交付金は、地元の自治体や企業と連携し、産業振興や専門人材の育成に取り組む事業に配るとしている。

3. 文理融合の地域振興型大学への転換

文部科学省は、「学びの個別化に重点」^{参6)}の中で、大学や高校段階では「文理両方」の学びを打ち出している。人文・社会科学系の学部に進んでも数学や工学など大学の授業の見直しを即すほか、大学入学共通テストで「情報」を科目に追加することを検討している。高校では現在、普通科生徒の約7割が文系だが、確率や統計などを学ばせることで「文理分断」を改めることも盛り込まれている。

加えて早稲田大学は、現行のセンター試験に代わって2020年度から「大学入学共通テスト」が始まるのに合わせ、新しい入試制度の概要を発表した^{参7)}。政経学部では一般入試で初めて「数学」を必須科目とする。その理由として「論理的思考力が重要」とし、学部長は「基礎的な力と同時に、論理的思考力を身につけた学生に来てもらいたい」としている。

また、ベネッセ教育情報サイトには以下のようなことが記載されている^{参8)}。「文科省のまとめ…(中略)…入学定員の前年度比を学部の分野別に見ると、ある傾向が存在することがわかる。「人文社会」は…(中略)…3年間で合計1,696人減と大きく減っている。さらに「教育」は…(中略)…3年間で合計1,032人減、「理工」も…(中略)…3年間で合計1,673人減となっている。一方で、逆に定員が増えているのが「共創学部」などの新しいタイプの文理融合型学部や、「国際地域創造学部」など地域経済に役立つ人材を育て上げる地域振興型学部といった「その他」の分野である。「その他」の入学定員は…(中略)…3年間で3,470人も増加している。また文理融合型は、従来の工学部や理学部を母体になっている場合が多く、先に挙げた「理工」分野の定員減少分は、こちらに振り替えられている。つまり、純粋に定員が減っているのは「人文社会」と「教育」の分野ということである。

このことから国立大学では、「人文社会系から文理融合型学部を含む理工系へのシフト」「教育学系の定員削減」という二つの事態が進行している事実が浮かび上がってくる。これは2015年に文科省が国立大学改革の方針として、教員養成系学部の縮小と人文社会系学部の「社会的要請の高い分野への転換」を大学に通知したことが原因である。」

これらの社会情勢を踏まえ、本学においても文理融合の地域振興型大学を目指してはどうかと考える。

4. 地域との共創を理念とした未来の大学

市立大学であることから、津市に必要とされる大学を目指す。停滞した地方都市津市の持続

的な発展と活性化を担い、地域創生や地域再生、地域振興に資する大学としたい。例えば以下のような学科構成を検討してはどうだろうか。

学科名は、「地域共創学科（仮称）」とし、文理融合の地域振興型学科として多様な地域貢献を展開する。コンセプトは、「地域の経済」、「政策づくり」、「ひとづくり」、「まちづくり」、「食づくり」を担う人材の育成を通して、「地域社会、地域づくりへの貢献、地域の未来を地域と共に創る」とする。学科構成は、情報科学、環境問題、英語教育をインフラ（基盤）とし、①「地域経済学専攻（仮）」：地域経済・経営関連の科目を中心に「地域の活性化やしごとづくり」を学ぶ。②「法律政策学専攻（仮）」：生活に密着した法律・政策関連の科目を中心に「地域の政策づくり」を学ぶ。③「人間形成学専攻（仮）」：地域福祉・心理関連の科目を中心に「地域福祉やひとづくり」を学ぶ。④「都市デザイン学専攻（仮）」：建築・都市計画関連の科目を中心に「建築、デザイン、まちづくり」を学ぶ。⑤「食物栄養学専攻（仮）」：食物栄養科目を中心に「食のマネジメントや食のブランド化等を含む食づくり」を学ぶ。⑥副専攻コースとして、「地域共創コース（仮称）」を開講し、主専攻以外の「地域との共創」に資する科目を履修できるようにする。各専攻修了短期大学士に加え、副専攻コース修了者には、地域共創コース（仮称）修了書を与える。

加えて、学科共通の教育プログラム「PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）科目」、プロジェクト型の地域問題解決型授業を開講する。例えば、津市内商店街などの活性化や再生を課題に、学科全体の学生による共同演習授業を行う。PBL科目は各専攻から教員1～2名程度が参加し、各専攻学生を混成した受講生5名程度を1グループとして、津市内の地域問題の解決を提案するプロジェクト型の選択演習科目とし、学生と企業等の早期顔合わせによる市内就職と定住に向けた展開を図る。このような学科再編を伴う大学改革を図り、副専攻コースとPBL科目を開講し、地域に貢献し地域に必要とされ、地域で活躍する人材を育て上げる大学、地域を共創する大学を目指してはどうかと考える。

ちなみに近接している国立大学法人三重大学工学部においても、2019年度より現行の1学部6学科体制から1学部1学科（総合工学科）6コース体制へと改革され、その内1コース（総合工学コース）においては、2年次から他の専門分野5コースを選択できるフレキシブルな柔軟性のある体制を構築している^{※9)}。人材育成の目標は、工学共通の幅広い知識、及び情報関連技術を育成する人材、異分野とのコミュニケーション能力を持つ人材、学科の垣根を超えた学際分野も理解する研究者・リーダー、卒業後の実社会で自己学習できる人材などとしており、本学も大いに参考とすべきところである。

また、札幌大学においては、1学群13専攻を有し、主専攻を選択しながら主専攻の学びに集中するコースと、主専攻と副専攻の組み合わせで学びの幅を広げるコースがあり、自分で学びを形づくることのできるとしている^{※10)}。千葉商科大学商経学部においても、3学科であるが13コースを有し、複数専門制により学科の壁を越えて、2つのコースを選ぶことができ、将来の夢に合わせて幅広い知識を身に着けることができる^{※11)}。加えて、「中教審が描く2040年の大学像」

では、志望対象も縦割りの「学部」や「学科」ではなく、「学位プログラム」を導入し、学生は取りたい学位を決め、大学が示したプログラム例を参考に文系・理系を問わず、多数の学部に散らばる講義を選んで学ぶとしている^{参12)}。

そこで、本学、地域共創学科（仮称）の意義やねらいは以下のとおりである。①1学科多専攻の意義。専門教育から総合教育へ、多様性と柔軟性のある教育へ、各専攻の学問領域を横断した教育の総和、総合化を目指す。②企業や団体等に求められる人材の育成。キーワードは、参加、協働、多様性、異業種交流、そして、シナジー効果。スペシャリストからゼネラリストへ、マネジメントの出来るスペシャリストを目指す。ゼネラリストは困難でも、多様な意見を取り入れる能力が必要であり、マネジメント能力や異分野とのコミュニケーション能力が必要となる。これが、実社会で活躍する人材を育て上げるためには一番大事なことである。③学生への効果。上位の学生には、専攻の専門的な知識・技術を習得し、幅の広い総合的な知識の習得も可能となる。中位の学生は、専攻の専門的な知識・技術を目指して、総合的な視野を広げることが可能になる。下位の学生においては、専門的な知識・技術に困惑しても、多様な知識に興味を持つ機会を提供することができる。何より卒業後、本学卒業生の多様な異業種ネットワーク形成に資する。この異業種ネットワークこそが、社会人にとって最も大切で必要なこととなる。

5. 結びにかえて

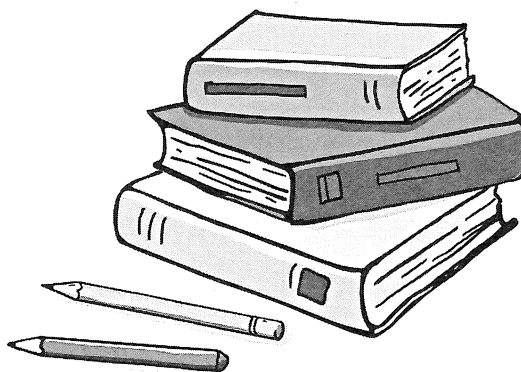
18歳人口の減少など大学が取り巻く状況が厳しい中、各学科専攻が際立つように別々の学科や専攻に独立した方が各学科専攻の宣伝効果があり、入学希望者の増加に繋がるという考え方もある。しかしながら、地方の1学年昼間定員250名の小さな市立短期大学を目指す方向はそれでよいのだろうか。個々の学科専攻が定員確保に努力するのは当たり前のことであり、それ自体は目的ではない、ましてや理念ではない。定員確保が目的化してはいけないし、学科専攻単独ではもう人は来ない。最新の大学動向を見習い、各学科や専攻・コースが連携した総体として大学全体の魅力を高め地域に貢献する。そこに地域経済に役立つ人材を育て上げ、社会的要請の高い「地域を共創する大学」の意義がある。

ここは大学総体として、多様性と柔軟性のある教育へ、各学科及び専攻の学問領域を横断した教育の総和、総合化を目指し、地域に必要とされ、地域に貢献し、地域で活躍する人材を育て上げる地域の大学を検討すべきではないか。異分野とのコミュニケーション能力を有した人材を育て上げ、地域を共創する大学へと生まれ変わる必要があるのではないか。卒業後、実社会の地域で活躍する人材を育て上げること、それが地方都市に立地する小さな市立短期大学の使命である。地域で活躍する優秀な人材を継続的に育て上げて行けば、入学希望者は必然的に増えていくものとする。つまり、入口の学生の確保も大事であるが、出口となる学生の就職と地域での活躍の場を創り上げることが最も大切なことである。中長期的にみれば、きっと地域に必要な地域に貢献する大学、「地域を共に創造する大学」を、大学総体で目指す未来の方が

地域に受け入れられるに違いない。

参考文献

- 1) 文部科学省における地方大学活性化への取り組み (2015年度)
- 2) 三重県高等教育機関を核とした地方創生に向けた取組 (2015年度)
- 3) 三重短期大学生生活科学研究会紀要No.65 (2017): 地域活性化に向けた地方公立大学のあり方に関する考察 ―津市立三重短期大学の建替え検討を事例として―
- 4) 津市立三重短期大学将来構想に向けた検討資料: 生活科学科生活科学専攻 (2018.4.5)
- 5) 地方大向け新交付金、政府が創生戦略改定: 日本経済新聞掲載記事 (2017.12.19)
- 6) 「学びの個別化」に重点、A I時代の教育研究へ: 朝日新聞掲載記事 (2018.6.3)
- 7) 早大の政経学部入試、数学も必須に: 朝日新聞掲載記事 (2018.6.8)
- 8) ベネッセ教育情報サイト: <https://www.benesse.jp/kyouiku/201802/20180219-1.html>
- 9) 国立大学法人三重大学 工学研究科・工学部案内2019
- 10) 札幌大学 学群・専攻h p : <https://www.sapporo-u.ac.jp/department/>
- 11) 千葉商科大学 商経学部 学科・コースh p
: http://www.cuc.ac.jp/dpt_grad_sch/shoukei/sec/index.html
- 12) 中教審が描く2040年の大学像 A I時代「最高学府」の岐路: 朝日新聞掲載記事 (2018.8.6)



学ぶ力から生きる力へ

法経科 経商コース 講師 鷲尾 和紀

はじめに

皆さん、学生生活はいかがでしょう。学校は学ぶところでもありますが、それ以外にもやりたいことはたくさんあります。その中でいろいろな希望、将来の夢や目標を持って三重短期大学（以下「ミエタン」とする。）での学生生活を全うしていると思います。いろいろなことがある中、将来の夢や目標を達成するには今でしかないこと、ここでしかできないことは必ずあるはずです。その今でしかないことをミエタンでの2年間で、自分の中で考えてどう選択をし、それを実行してきた人が、卒業後の進路だけでなくその先のことまで見えてくるものだと思います。進路によってはミエタンが最後の学生生活になるかもしれません。そのためには今まで学んできた力を生きる力へと変えていかななくてはなりません。これを私が普段授業を行っているマーケティングでの講義内容と合わせてお話していきたいと思います。

1. まずミエタンってどんなところ

ミエタンは津市立の短期大学です。今日、所得水準のことや奨学金問題がとりざたされている中、学費の安さで入学希望される方がいらっしゃいます。また進路先も充実しており、さまざまな方面で卒業生が活躍しております。

2. 入学して考えなければならないこと

それぞれ入学する前後はいろいろな思いがあり、入学した後も大学ってどんなところだろう？今までと違い専門的勉強ってどんなことするのだろうか？今回を機に一人暮らしを始めて慣れない土地でやっていけるのだろうか？・・・それだけで頭の中がいっぱいで落ち着きません。

しかし、2年間というのは長いようでとても短いです。裏を返せば2年後には次のステップに進まなければなりません。次のステップに進むためにも入学前から目標が定まっているのであれば、それに向けて取り組むことは素晴らしいことです。また大学とは将来に向けた自分探しをゆっくり考えられる時間でもあります。そういった意味で高校から進学して自分の将来に向けて視野を広げるところだと思います。

3. 日頃からの意識で代えられるもの、代えられないもの

先に自分で代えられないものを説明したいと思います。前述した通り入学して2年後には次の道へと進まなければなりません。その道の選択肢として、大きく分けて就職をするか編入をするか、ミエタンでは編入の実績が多いです。例えば就職の場合、近年就職活動のスケジュール

ルは年ごとに変更されていて、その年ごとに活動する学生には苦勞をおかけしますが、就職活動解禁日が決まっているのであればその日までに準備をしておかないと解禁日から動けません。編入の場合、試験日は事前に発表されます。公務員試験も試験日は事前に発表されます。学校でも試験日を自分の都合で代えることができますか？レポート提出日も変えることができますか？自分の都合で勉強不足だから10日後にしてくれませんか？って、不可能ですよ。それらの試験日に自分の力を100%に合わせられた人が合格を勝ち取れるものだと思います。

ではそれをいいわけにして試験ができなかったから人のせいにしますか？試験の問題のせいにしますか？本当に予期もしないことで結果が伴わなかったならば仕方ない部分はありますが、本当にその大事な日までに自分がアプローチしてきたかどうか、そこは前もって予定を組み自分で代えられるものだと思います。

4. 時間の使い方

時間の使い方として大きく2つに考えられます。1つは最初から行われる時間と拘束時間が決まっているもの。今一つは時間配分は自由だがその何かを行うなら時間をかけなければならない、または必然的に時間がかかるため拘束されるものと分けられます。

前者は、例えば授業時間やバイトの時間を指しています。何曜日の何時から何時までといったところから、その時間に必ず出なければなりません。

後者は、勉強時間や通勤時間等。よく資格を取るのに所要学習時間を目安としていることがあります。合格するための目安ですが、最低限の目安でもあります。これは必ずこの日の何時にしなければならないというわけではないが、一定時間をかけないと合格には届かないということです。個々の性格や要領になってきますが、その勉強時間の予定を拘束時間にしてしまい、やろうと思ったときに何かしら予期しないことが起こった経験はございませんか。体調不良になったり気分的なことだったり、自分の事以外で時間を割くことになった。前日にテスト勉強しようとしたら体調不良でできずテストが散々だった。それはもしかしたらどこかでテスト勉強する時間があったはずなのに前日という時間にまわして拘束をしてしまったため必ずやらなければならない状況になってしまった。けど何かの理由でできなかった。今できることでも後回しにしたら結局できなくなった。それで損をしまっている経験はありませんか。進路決定時にその方法で行いますか。通勤時間も通勤時間だけだったらその所要時間が拘束されており、通勤時間の使い方も工夫している方はいらっしゃいます。

前者は必ずその時間にこなさないとイケませんが、後者は拘束時間とせず自分から時間を作ることが大切になってきます。その時間の使い方を混同してしまうとこなせるものもこなせなくなってしまうことがあります。

私は今できるものに対しては後回しにはしません。例えばテストの採点は当日のうちに終わらせ、後はゆっくり自分の時間を有効的に使えるように心がけております。もしくは次の新しいことに取り組めるようにします。実はこの原稿も依頼が届いた日にベースを作り、締切まで

は余裕をもって編集してました（笑）。

5. 準備という大切さ

皆さんは毎日起床してから朝出発するまでどれくらいかかりますか？学校までどれくらいかかりますか？それは人それぞれです。しかし1限の授業は8時50分から始まることは決まっています。どうやって8時50分までに間に合うようにしますか？これは当たり前のようにしていることだと思います。これを意識的に考えると、例えば起床してから家に出るまで30分（着替えて、顔洗って、朝ご飯食べて）。家から学校まで1時間かかるとすると、さかのぼって単純計算すると7時過ぎには起床していないと授業には間に合わないということになります。合わせてきちんと体調を整えて授業に集中できるようにすることも大前提で、それには睡眠時間を十分取る等、睡眠時間を確保するには夜更かししないで早く寝る。あたりまえですよ。これはあくまで明日学校で授業を受けるという短いスパンでの計画ですが、これを進路の試験日となるとどうでしょうか。

前述した通り試験日というのは決まっていて自分の都合で代えることはできません。まずその試験に合格することが目標であります。ではその合格に向かって過去問を見たとき難しいと感じた場合どうしますか。諦めることは置いといて、もし自分の現時点の力と過去問との差があった場合、少しでも近づけるように努力すると思います。

ここでやりがちなことは、試験日が近づいたら動き出そうとする人。本当にその感覚のできるのであれば問題ありませんが、感覚だけで判断していませんか？それが原因で失敗を繰り返して後悔したことはありませんか？もう少し前もってやっておけばもっといい結果が出ていたとか。これも4で書いた通りです。実際これは自分がどういうタイプなのかといった自己分析がまだまだ突き詰めていないと思います。そのままの感覚を人生が左右するという時にその行動をしますか？そこも時間というところで突き詰めていくと1年生という間の1年間はとても短いです。時間というのは何もしなくても経過していきます。ただその時間は皆さん平等に与えられているはずですが、ただ人それぞれによって生活が異なる分、有効時間というのもバラバラになっているだけです。

明日の1限に間に合わせて100%の集中力をもって授業に臨むことも、試験日に100%の力を持って臨むことも、その時までにはきちんとした準備があったから望めたものだと思います。

6. 青山学院大学陸上部原監督の指導方法

結局、成功する人は頭がいいから、勉強ができるから、運動神経いいから等、世の中決してすべてそうではないですよ。スポーツでも団体競技で強い人が集まればそのチームは強いとは限らないですよ。ここで近年箱根駅伝で連覇をしている青山学院大学の原監督の指導方法を紹介したいと思います。

近年箱根駅伝で連覇をしている青山学院大学ですが、決して高校時代のトップランナーを集

めて、がむしゃらに練習して勝利しているわけではありません。そこには練習をするプロセスに監督の独特な考え方があります。

箱根駅伝は毎年1月2、3日に行われるのは決まっている。箱根駅伝のレースという刹那な駆け引きに勝つため、ゴールをするためには逆算して計画できる力が必要だと考えている。まず勝負強さをどうやって養われていくのかというと、「普段の積み重ねがものを言う」と述べている。

「スポーツもビジネスも同じで、成功の8割は丁寧な準備があってこそ、こだわりをもって物事を突き詰め、何が正しいのか理解し、常にアンテナを張りながら進めていく。そういった積み重ねがあるから、瞬間の勝負で勝ちを拾うことができる。」要するに、「試合が始まる前に勝負事はある程度決している」。原監督はビジネスマンを経て現在学生陸上部の監督を務めている。ビジネスでの経験をスポーツ界でも発揮して成功を収めている。

また「常に周囲を観察し、相手を気負う姿勢を身につけることで、物事の本質を理解できるようになる」と考える。「メールやSNSも便利だけど、大事なコミュニケーションはFace to Faceで行う。そういった泥臭さが深い人間性を育てる。そして本質を追求していくと、ときに軋轢を生むこともあるが、そこで折れてはいけない。これまで真剣な取り組みで確立した信念はたとえ裏付けがなかったとしても、続いて熱意を持って推し進めていく。」と述べている。

7. 築地で働いている人が心がけていること

2020年の東京オリンピックの影響もあって豊洲の移転問題が騒がれていた日本一の規模を誇る築地市場。激務の中でも毎日心がけていることがあるという。1日の業務の流れとして、始発より早く市場に到着し、市場で届いた魚を競りにかけるのがメインの業務であり、勤務そのものは昼過ぎには終了する特殊な職場である。誰にでも仕事の後の楽しみというのがあるわけ、その楽しさを追求するため職場では必ず心がけていることがあるという。

それは「準備」だという。1日の業務の流れとしては競りが業務のピークとなるのだが、メイン業務である競りに課題を残さないためにも、競りの業務を常に100%の状態を迎えるためにも、必ず帰る前に翌日の準備を行ってから帰宅することを心がけている。そうするによって、帰宅した後も仕事のことの不安がない中、仕事の後の楽しみを100%で満喫できるように生活している。これは仕事としての準備を行っていることだけでなく、その後の自分の時間に対しての準備も行ってどちらも100%な状態でこれを20年以上続けている。そんな素晴らしいことはない。今日の時代背景は労働状況もさながら、私たちの生活そのものが疲弊している。しかしそれを一つの工夫や心がけで生きるという楽しさを満喫している。マーケティング戦略としてもその時代背景に対してアプローチしなければならない課題が上積みである。

8. その力を発揮するには

原監督の指導方法を皆さんの立場に置き換えてみよう。毎日授業を受けることはもちろん、

自分の目標に対して日にちや期限が決められたらどうでしょう。例えば英語の試験がある。たくさん単語を覚えなければならない。だけど一度では覚えられない。ならば1日何個覚えると目標を立てて行うでしょう。それが溜まって気づいたら何千個となっている。それが「ちりも積もれば山となる」ともいえるし、その覚えられたことは「普段の積み重ね」があったことだと思います。論文作成については一夜漬けでできるものではありません。論文を書き上げる成功のカギは少しずつ積み上げていくこと。そこはゼミの先生が丁寧な指導をされている。でもそれは頭がいいから、勉強ができる人だからできる。それは違います。もしかしたら「ちりも積もれば山となる」「普段の積み重ね」といったことができてからテストでも良い点が取れて前に進んでいるかもしれない。

もう一ついえることは、現代は情報化社会となり情報過多とも言われている。今やスマホを片手に何でも情報が入る時代になっている。試験日にしても日程は自分が受ける年度にならないと正式発表されないが、例年同じような日程で行われているのならば、それだけでも予測はつく。そういった些細な情報量は前もって受け取れる。情報といってもたくさんありすぎてもしかしたら違う意見の情報があるかもしれない。そこを見極めるには自分がどうしたいのかという自己分析をすることが必要である。そこにこだわりをもって物事を突き詰め、何が正しいのか理解し、常にアンテナを張りながら進めていくことで自分自身の己の力を発揮することができるのではないか。

その力を発揮するためにも、今から何をすればその目標に達することができるのかと、課題が見つければ自然に自分の計画表ができる。その計画そのものが目標に対する準備ではないか。

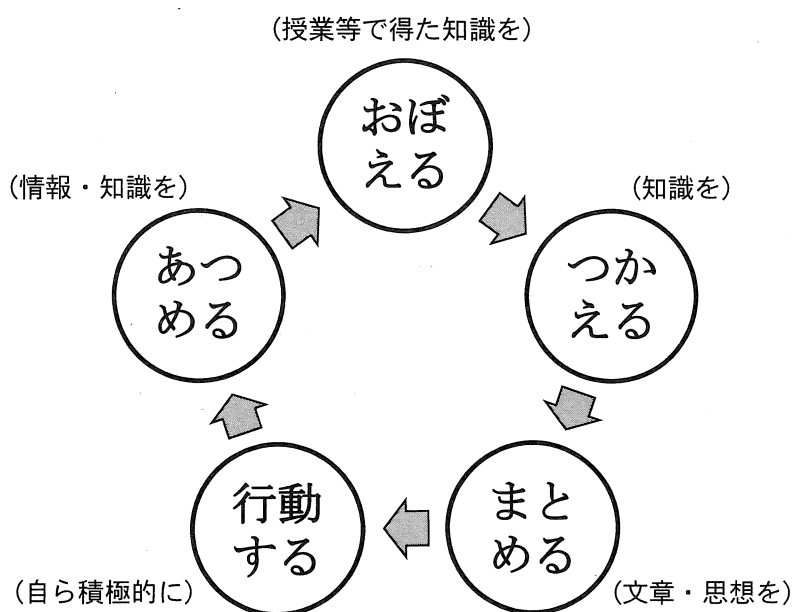
9. 私が学生に対して心がけていること

私は誰もが楽しい生活を送ってもらいたいと考えている。それは今だけでなく生まれてから死ぬまでずっと、と思っている。そのためには今何をすべきなのか、ミエタンという位置と学校の雰囲気は学びながら生きるということと同時に考えられる場所だと思っている。私は、「自分が本当にしたい楽しさを追求すれば、そのために今何をしなければならないのかおのずと見えてくる」と普段の授業でもゼミ生にも伝えたい。ただそのために今の楽しみを犠牲にするのは酷である。努力をすることは苦しいが、努力そのものを目的にするのではなくその先にあるものを目指して努力しているわけだから。マーケティングは普段の日常生活の中に溢れていて、普段の生活からでも授業で覚えたことをちょっとでも意識するだけでマーケティングの勉強が楽しくなると思うし、普段の生活も楽しくなるといつも話している。今までの固定概念もあってかその意識を変えることがなかなか伝わらない。今後のマーケティング戦略としても、個々の生活に対してどういったものを提供すればその人にとって幸せなものになるかがテーマとなっている。ゼミでは「楽（たの）しいけど、楽（らく）ではない」をモットーとしている。

現代に起きているさまざまな諸問題に対して、立ち向かっていかなければならない場面に直面するだろう。ただ直面することはあっても、それを避けるという術はあるだろう。そのため

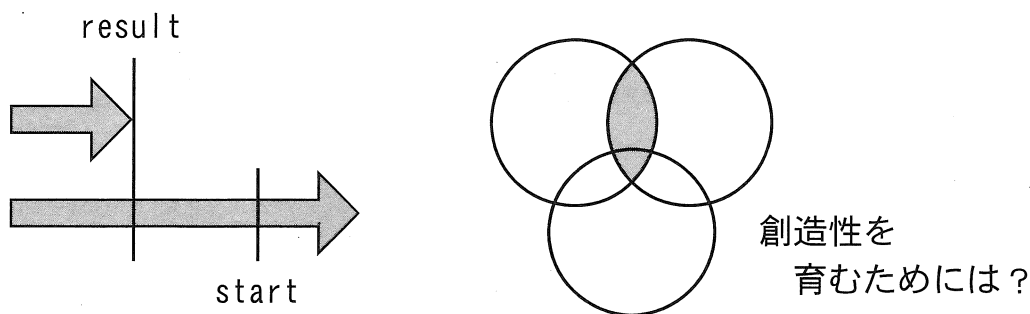
視野を広げるために学びに来ているのであって決して無駄ではない。ミエタンの法経科は法律も経済も学ぶことができる環境が素晴らしい。また小規模なところから先生全員が親身になって学生の夢や目標をかなえようと全力で取りかかってくれる。ミエタンに来る子たちはみな優秀である。しかし、ただ覚えただけで止まってしまっている人が多い。

その実際使い方をどうすればよいのかわからない実態から、学校で学ぶと社会で生きるとの乖離、世の中の社会問題が起こっているものだと思われる。そのできる能力をうまく引き伸ばすことをするのが先生の役目であると思う。最後に私が考える教育展開モデルを提示して終わりとしよう。



スタートを「あつめる」から「行動する」を1周とし、行動した後に何かの課題が浮き彫りになった時や1回のサイクルが終了し次のステップに進むとき、新たな情報等を集めようとするだろう。そうやって周回していくものだと思われる。

「まとめる」というのは文章としてまとめるという意味を含んでいます。



私は、AI に取って代われない授業を目指します！